# フーガ

灯りに照らされた地下駅のベンチに
汚れの目立つプラスチックのベンチに
私は座り続けていた

ごうごう、という振動と
風とともに電車が停車しては発車して行く
私を乗せることなく、到着しては去ってゆく

今が朝早くなのか、午近くなのか
それとも真夜中なのか、それはわからない
ただ、乗り降りする人の数が、時折急増するときがある

様々な人々が、まるで雲のように通り過ぎる―――
そのさざめきは、あたかもフーガのようだ
言葉なんてわからない―――何を話しているかなんて

もう、長いことお日様の光を浴びてはいないけれど
雨風に打たれることも随分となかったけれど
それなりに暖かかったり寒かったりして季節はある

どこか、こうした地下で暮らし続けることでもいい
家族を持って、つましやかな地下生活を送るのだ
それでも寂しければ友達も呼べばいい

そうしたことできっと人並みの喜怒哀楽も生まれよう
深刻な悩みにうちひしがれることもあろう
地上の生活と何ら変りはしない

ここにも馥郁たる香りがあり
温かな、またぎすぎすした社会がある
なぜ、皆、足早に通り過ぎるだけなのだろう

また、人が降りてきた
地上の家へと急ぎ足で階段へ向かう人々だろうか
すると、もうすぐ夕飯の時刻なのだろう

私はいつまでここに居るのだろう

*なぜ席を立つことができないのだろう*
*帰る場所―――単に、それがないからだろうか*

*こちらへ、ちらりと投げられた視線に引き摺られ*
*階段を上ろうか、でも―――*
*上ったところで、どうなるというのだ*

*結局のところ自分ひとりの部屋に閉じこもるだけだろう*
*しかも、今度こそ誰もいない一人きりの部屋*
*そこで息苦しさに沈んでゆくだけだろう*

*きっと、そうやって人は死んでゆくのだ*
*きっと、そうやって人は殺してゆくのだ・・・*

*(2005.5.3)*